

連載

ルポルタージュ

# 告発!

# 『医療過誤の現場から』

写真 伊藤隼也

## 被害者・家族たちの叫びを聞け

手術ミスや治療ミスに対し、患者・遺族らが訴えた医療過誤訴訟は、年々増加している。最近では年間1000件以上の訴訟が行われている。しかし、訴訟したとしても、被害者や家族たちの苦悶は決して消えることはない。2回にわたり、医療過誤の実態を浮き彫りにする。

仕事をしながら、必死に二人の子供を育てる伊藤さん(写真裏表)。写真裏表は本に果てて出かけるのが大好きなんです。

## 出産事故

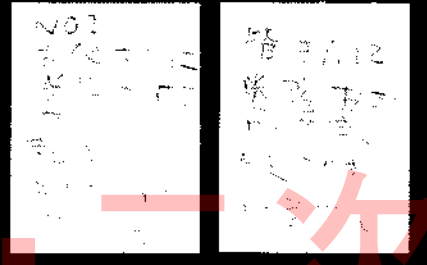
九州 伊藤昌美ちゃん (7歳)

分娩時期を誤ったため、脳に後遺症





▲晴美さんが結婚する前の'85年、ドライブに行ったときに撮った写真。当時、晴美さんは22歳  
◀'87年、結婚式で、ウェディング姿の晴美さん。このときがまさに幸せの絶頂期だった  
▼晴美さんの直筆メモ。痛々しさが伝わるが、いまではこの程度までは文字を書けるようになった



出産時の医療ミスで、初めてのわが子に重度の傷が残ってしまった伊藤祥子さん(37歳、P・J写真)は「あの時のことはけっして忘れることはない」と語る。

予定日を2週間以上過ぎてても陣痛がこない過期妊娠状態となった祥子さんは、91年2月7日、「心配だから」とかかりつけの九州の県立病院に入院を申し入れるが、満床であること、検査の結果、胎児も問題ないという理由から入院を断られる。

2月11日昼、ようやく陣痛が始まり、夕方6時半頃に入院。分娩監視装置を付けるが、陣痛間隔はなかなか狭まらず、子宮口も開かない。

翌12日午後、祥子さんの母親が母体の体力を心配し、「帝王切開」を申し入れるが

「人手が足りない」との理由で断られた。祥子さんは、すでに妊娠42週を過ぎた過期産であったため、羊水混濁等の胎盤機能低下が予想された。ならば、それに伴った心音悪化等の胎児仮死の兆候をいち早く察知し、帝王切開等の処置を迅速に行われなければならなかった。しかし、胎盤機能検査は入院後一度も行われず、驚いたことに分娩監視装置は12日午前3時前には外されていたのである。

13日朝、分娩監視装置を再度付けた時には、胎児の心音はすでに悪化しており、胎動もなかった。帝王切開をするが時すでに遅く、昌美ちゃんは産声をあげることなく皮膚もどす黒い重慶仮死状態で生まれた。

昌美ちゃんは母体の中で仮死状態が長く続いたため「低酸素性脳症」になり、その後遺症で重度の心身障害を負ったこととなった。7歳になったいまでも首が据わらず自分の意志で四肢は動かせない寝たきりの状態。

「重度の知的障害で、視力もほとんどなく話すこともできません。でも耳は聞こえるので、歌を唄ってあげると口を開けて笑顔が浮かべるんです(祥子さん)」

医療過誤裁判は、昨年和解が成立したが、病院側の罪は重い。

事故後、祥子さんの夫は父親としての負担に耐えかねたのが、姿を消してしまっただけでなく、祥子さんは「マーちゃんのためなら私は何も怖いものは無い」と昌美ちゃんと弟の年君の二人の子供を抱え、精一杯毎日明るく生きている。

受けた。しかし、その直後から難阻がひどく「切迫流産」と診断され6月2日に入院、治療を受け始める。

入院後も激しい吐き気、嘔吐が続く晴美さんは、ほとんど食事が摂れず、絶食と点滴の妊娠悪阻治療を受けるが、見る間にやせ細り、入院時に53kgあった体重も7月半ば過ぎには40kgと激減し、足取りもふらつくようになった。

7月27日から高カロリー輸液(点滴)を始めるが病状はさらに悪化し、危篤状態に陥った。医師は髄膜炎か、あるいは妊娠そのものがこの事態の原因と疑い、8月4日に中絶手術を行った。

しかし、原因は初歩的ミスだった。点滴の中にビタミンB<sub>12</sub>をまったく入れていなかったことが直接の原因だったのである。そのため、体内のビタミンB<sub>12</sub>が不足し、ウエルニツケ脳症を発症させていたのだ。

晴美さんは四肢麻痺、構音障害、意識障害などの後遺症が残り、介護なしには生活できない状態になってしまったのである。

点滴の中にビタミンB<sub>12</sub>を入れることは考えませんでした。彼女の病状がウエルニツケ脳症と関連しているとは診断がつかなかった。病状についてはすべてわかっていくわけではないんです(当時の主治医)

反省のかけらもないこの言葉に、怒りをあらわすこともできない晴美さん。

「娘は事故のこと、結婚生活のことなどは何も憶えていない。自分がなぜこうなったのかもわからないんです(弘吉さん)」

現在、晴美さんはリハビリの成果で杖をつけば弘吉さんと二人で散歩ができるようになった……。

妊娠悪阻治療時の医療ミスにより、多くのものを失った阿部晴美さん(35歳、P・J写真左)。

「医療事故に遭った前の子は、とても健康的で明るい娘でした。それが夫とも別れ、一人では生きていけない身体になってしまった」

父・弘吉さん(35歳、P・J写真右)は、予想だになかった愛娘を襲った事故を忘れられる日は、一日として無い。

晴美さんは、24歳の時に恋愛結婚。一日も早いわが子の誕生を願ったが、2回の流産。90年11月、近所の病院の紹介で国立大蔵病院(東京・世田谷区)で流産に対する免疫治療を受け始めた。

90年5月、待望の妊娠5週との診断を

受けた。しかし、その直後から難阻がひどく「切迫流産」と診断され6月2日に入院、治療を受け始める。

入院後も激しい吐き気、嘔吐が続く晴美さんは、ほとんど食事が摂れず、絶食と点滴の妊娠悪阻治療を受けるが、見る間にやせ細り、入院時に53kgあった体重も7月半ば過ぎには40kgと激減し、足取りもふらつくようになった。

7月27日から高カロリー輸液(点滴)を始めるが病状はさらに悪化し、危篤状態に陥った。医師は髄膜炎か、あるいは妊娠そのものがこの事態の原因と疑い、8月4日に中絶手術を行った。

しかし、原因は初歩的ミスだった。点滴の中にビタミンB<sub>12</sub>をまったく入れていなかったことが直接の原因だったのである。そのため、体内のビタミンB<sub>12</sub>が不足し、ウエルニツケ脳症を発症させていたのだ。

晴美さんは四肢麻痺、構音障害、意識障害などの後遺症が残り、介護なしには生活できない状態になってしまったのである。

点滴の中にビタミンB<sub>12</sub>を入れることは考えませんでした。彼女の病状がウエルニツケ脳症と関連しているとは診断がつかなかった。病状についてはすべてわかっていくわけではないんです(当時の主治医)

反省のかけらもないこの言葉に、怒りをあらわすこともできない晴美さん。

「娘は事故のこと、結婚生活のことなどは何も憶えていない。自分がなぜこうなったのかもわからないんです(弘吉さん)」

現在、晴美さんはリハビリの成果で杖をつけば弘吉さんと二人で散歩ができるようになった……。

# 点滴ミス

神奈川県川崎市  
阿部晴美さん  
(35歳)

点滴時の初歩的ミスで、  
四肢麻痺、意識障害に

現在の晴美さん（左）と、父親の弘吉さん（右）。「晴美は朝起きるといつも玄関先に立って私を待っているんです」（弘吉さん）

転載 禁止